

P.マヌリ:東京のパッサカリア

フィリップ・マヌリは「ブーレーズ以降もっとも注目されている」フランスの現代音楽作曲家。ライブ・エレクトロニクスの先駆者として知られ、親日家で日本との縁も深い。本曲は 1994 年に作曲されたピアノと 17 楽器のための室内楽作品で、アリオン音楽財団〈東京の夏〉音楽祭の委嘱による。核となる音を中心に鏡のように構成されており、パッサカリアの基本主題がこの音に対してシンメトリックに提示される。その主題が何度も変形していく過程で、次第に歪んだ鏡のなかに映し出されていく。

ベリオ:フォーク・ソングス

この歌曲集は、ベリオが米オクラホマ州のミルズ・カレッジに作曲科教授として赴任していた 1964 年、同カレッジの委嘱で作曲され、当時、妻であった声楽家キャシー・バーベリアンに捧げられた。声楽と 7 人の器楽奏者という編成だが、曲によって組み合わせが異なる。各国の民謡が 11 曲並び、それぞれの国の言葉で歌われる。第 1、第 2 曲は、アメリカの作曲家で民謡(バラード)収集家ジョン・ジェイコブ・ナイルズによる。第 3 曲はアルメニア、第 4 曲はフランス、第 5 曲はシチリア、第 6、第 7 曲のイタリアはベリオ自身の作品。第 8 曲はサルディニア、第 9、第 10 曲のオーヴェルニュの歌は、カントループの歌曲集《オーヴェルニュの歌》にも収められている。そして最後は威勢のいいアゼルバイジャンの恋歌で締めくくられる。

ブーレーズの作品

1969 年、音楽出版の老舗ユニヴァーサル社で長年活躍したアルフレート・カルマスの 80 歳を記念して 11 人の作曲家が短いスコアを捧げた。ブーレーズはフルート、クラリネット、ピアノ、ヴィオラ、チェロの編成による小品を作曲。2001 年に「即興曲 - カルマス博士のための」のタイトルのもとに改訂され、決定稿は 2005 年、ブーレーズの 80 歳の年に出版された。

「ル・マルトール・サン・メートル」は、1953~55 年にかけて作曲されたブーレーズの出世作。1955 年の初演時からリゲティ、アドルノ、ストラヴィンスキーらの称賛を浴びた。全 9 楽章からなり、テキストにはルネ・シャールがシュルレアリスム運動に携わっていた頃の詩集『ル・マルトール・サン・メートル』(主(あるじ)なき榎)から採られた 3 つの詩が用いられている。3 つの詩(「怒る職人」「美しい建物とさまざまな予感」「孤独な死刑執行人たち」)は、それぞれ前奏、後奏、変奏、補遺などを従えて入り組んだ構造をなし、音楽的には新ウィーン楽派から継承した緻密な構成と、フランス伝統の観念的な要素を統合している。ブーレーズ自身も認めているように、シェーンベルクの《月に憑かれたピエロ》の影響を受けており、アルトと 6 楽器という特殊な編成、曲ごとに異なる楽器編成、全曲が 3 つの系列に分かれている点などにその反映が認められる。